



寺泊の日本海にあくがれて
 梅雨——とどながる
 岸壁に立つ
 宮英子

町屋沿ぞひ小径を行けば桐苗は幼く鮮烈
 な緑あをき夏の葉

若やかに葉をひろげたる桐苗をしたた
 かに打つ昼すぎの雨

寺泊の日本海にあくがれて梅雨しとど
 なる岸壁に立つ

夜ふかく残置灯ともり防波堤を打つ波
 の秀の闇に光れり

三百年の庭の草芝に触れてとぶあきあ
 かねあり寺泊聖徳寺

口絵鑑賞 梅雨の寺泊

「寺泊行」5首より。平成15年6月28、29日、「新潟日報文芸選者に学ぼう in 寺泊」の講師として寺泊町を訪問された。初日の歌会では、約130首について1首ずつ歌評。その的確な指摘と、86歳とは思えないほど明るく楽しくエネルギッシュな話しぶりは、出席者に深い感銘を与えた。

寺泊は、海と山に挟まれた細長い港町。1、2首目、古い町並の中で、雨に打たれた桐の若葉の緑が鮮烈に目に映ったのだ。3首目、日本海の向こうには佐渡が見える。「日本海にあくがれて」は、長歌「朱鷺幻想」を詠んだ夫君・柁二を思っている言葉だろう。4首目、宿は港のすぐそばにあり、夜の窓からは灯に照らされた波が見えた。5首目、翌日の講演の終了後、聖徳寺（筆者の生家）を訪ねられた。庭には古い池があり、まだ色づかないアキアカネが飛んでいた。

平成17年、佐渡汽船埠頭の公園に3首目の歌を刻んだ石碑が立った。翌18年、寺泊町は長岡市に合併された。

（写真・鑑賞 田宮 朋子）



ふるさとコレクション——138

箱根寄木細工（神奈川県箱根町）

箱根寄木細工は昭和59年、国の伝統的工芸品に指定された。江戸時代から現在まで技術継承がなされている手りの木工芸品である、と認められて。

家康の命によって東海道は整備され、^{あいのしゆく}間宿^{はたじゆく}になった畑宿も物見遊山の旅人で賑わった。職人石川仁兵衛が箱根山系の豊富な樹種を用いて創作した寄木細工は、人気の街道土産となった。仁兵衛の寄木文様は箱根の石畳からの発想。現在基本60種、応用の文様は無限にある。

寄木細工は製法が二つ。天然木材が持つ多彩な色と木目を生かして幾何学模様^{よせぎざいく}に組み合わせ、大鉋で薄くすき箱などに貼る「貼り」と寄木の板またはブロックをそのまま製品に削り出す「無垢」。

作品は、寄り添った木々がそれぞれの個性を失わず、互いに引き立て合うところに集合体の理想を見る思いだ。手文庫・小物入れ・盆・茶筒などに触れると、木の温もりと匠の心意気が伝わってくる。箱根駅伝の往路優勝トロフィーは、^{かなざしかつひろ}年々金指勝悦の寄木の大作だ。

七手の仕掛けを解かないと開かない寄木の秘密箱に、イヤリングを入れて孫に贈りたいという人が、寄木会館に来たという。

（写真・解説 加藤 久子）